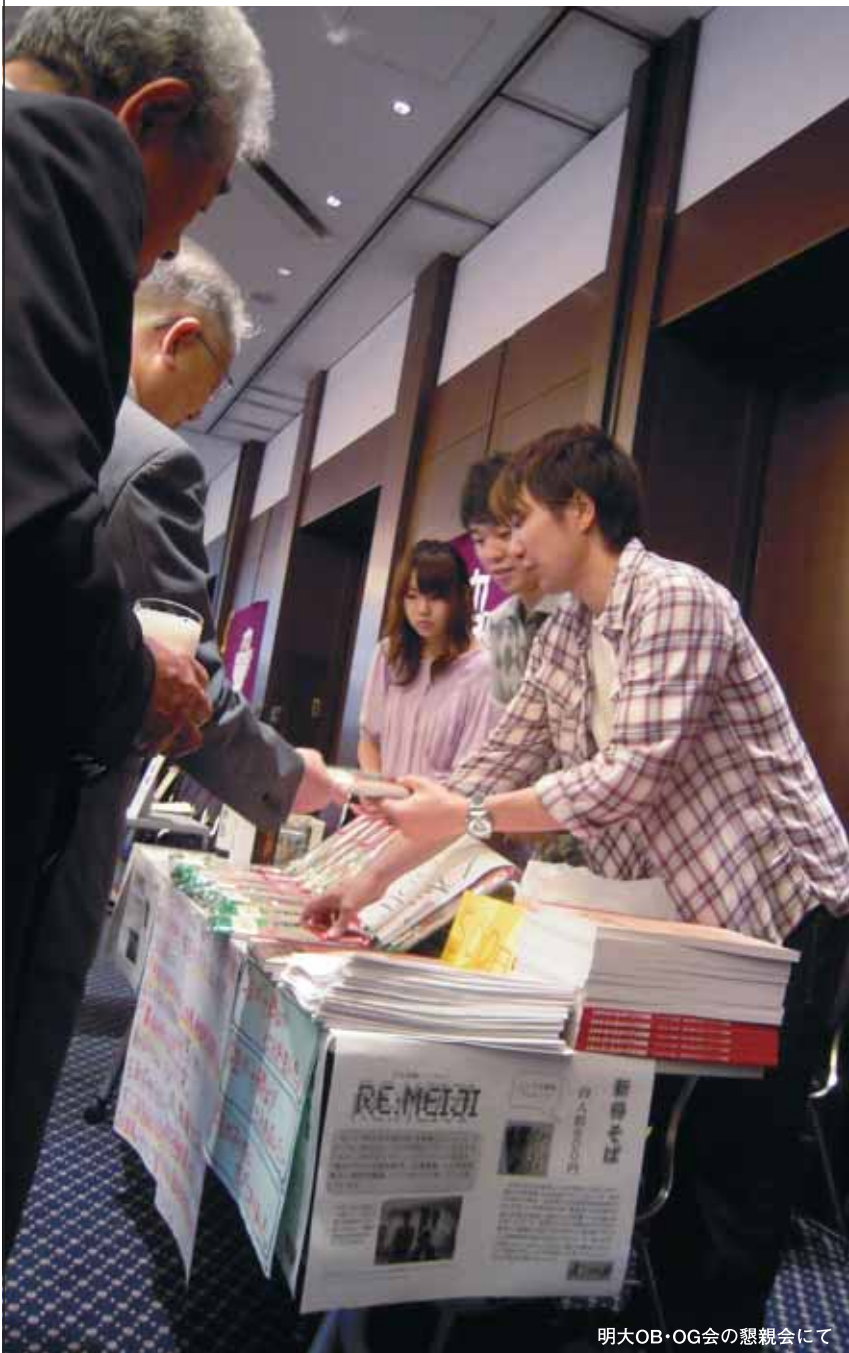


CASE 1

チームはまるで会社の組織 模擬ベンチャーに挑戦

「普通じゃつまらないでしょ…」と語る水野勝之教授のもとでは現在、学生が中心となつてさまざまなプロジェクトが進行中です。
例えば「千代田学」模擬ベンチャー体験「縄文生活体験スクール」「群馬県東吾妻町展示会」「子供のための金銭教育」「鳥取県の地域活性化活動」…。
会社組織に近い活動スタイルを通じて、一人ひとりが高い意識を持ち、目標達成に向けて取り組んでいます。

「木村隆幸(商学部 3年)
Takayuki Kimura



明大OB・OG会の懇親会にて



右:農林水産大臣賞を受賞した新得そば
左:水野ゼミの「水」と嫗恋の「恋」。学生がつくりました

無駄を少なくする姿勢

例
例えば『間伐・植林体験を行うプロジェクト』では、千代田区と姉妹関係にある群馬県嫗恋村が舞台。都市部からは大量の二酸化炭素が排出されていますが、植林によってこの二酸化炭素を削減するのがこのプロジェクトの狙いです。実際の活動には学生と一緒に千代田区在住の親子も参加し、現地での実体験を通じて環境問題に取り組みました。参加者は間伐体験をした後に、その余った間伐材をどう活用するかを自分たちで考え、「マイ箸を作ることにしました。伐採後の間伐材も無駄にしないという姿勢には、このプロジェクトに対する本気度が見て取れます。

学生が 子どもを育てる

次に紹介するプロジェクトは、同じ嫗恋村で行われた『縄文体験サマースクール』です。テーマとして「学生が地域で子どもを育てるには、どうしたら良いか」を掲げています。これは水野教授の「親や学校だけで子どもを育てるのは難しい。そこで『地域で育てる』というモデルケースを学生たちで作ってみよう」という考え方から設定しました。
学生たちは、千代田区で募集した子どもたちと嫗恋村に行き、建設後に活用されていなかった竪穴式住居で泊りました。魚を釣り、自炊生活をするなど縄文生活の体験を通して子どもたちの変化を検証しました。
子どもたちは、嫗恋村に行く前に、大学で学生たちから縄文時代や遺跡について学んだことで、それを現地で実体験に活かすことができました。学生にとつては、地域の眠っている資源を有効に利用し、子どもたちの育成にも関わることができました。両者が得たものは異なりますが、相互にとって良い経験になりました。

最高級『新得そば』を 直接仕入れる

『模擬ベンチャーの経営』も注目度が高い活動です。『Re・MEIJI』という名前の模擬ベンチャー会社を立ち上げ、「明大ブランドの認知拡大」「広域連携による地域活性化」「商学の実践」という3本の柱を軸にさまざまなブランドづくりやイベント運営を行っています。現在は、北海道十勝から仕入れた『新得そば』などの販売に取り組んでいます。
この『新得そば』は、平成元年度第一回全国そば生産優良経営表彰式の最高賞である「農林水産大臣賞」を受賞した一級品です。仕入れに際しては、学生が北海道に向いて品質を確認。実際に

にイベントでのブース販売やネット販売を行っています。また、7月には北海道で地元の人々を前に、『新得そば』の特産品としての魅力を改めてアピールするプロモーションを行いました。
「営業利益や目標達成率を決めるなど、全てをゼロから進めたことで、計画力、企画力、チーム力、行動力などの力を得ることができました。この経験は就職活動や社会に出てからも間違いなく役に立ちます」。(参加した学生)

教授が語る 理想の学生像

「やっぱり、マイナスをプラスに考えられる人。つまり発想の転換ができる人です。なぜなら、社会に出ても同じようにマイナスをプラスに転換していく力が必要とされるわけですから。そのためには、思いつきで挑戦して挫折して終わりではなく、何度もトライして考えては実行することが大事です。
自分とちゃんと行動し始めれば、偶然の風が吹いてくるものです。一歩を怖がらずに進むべし。そういう人間になってほしいですね」。(水野教授)

VOICE OF STUDENTS



個人の成長が大切。チームの成長はもっと大切。

チームの組織が実際の会社スタイルに近いので、より高い個々の責任とチーム力が要求されます。これを醸成していくことに一番苦労します。しかし、教科書を読んで得る知識と、限りなく実践に近い現場から得る知識は別物です。これからの目標は、個人はもとより、もっとチームが成長することです。その上で全員が責任を持って活動して行ければ、今以上に良い仕事ができると思います。

戸塚智洋 (商学部 3年)